



幼稚園保育法真諦 初版

第四編 「誘導保育案の試み」の扉

教育は、考えてばかりいては解けぬところがある。いわんや、論じ合っただけで、ますますことむずかしくなるのみである。試みて見るにかぎる。そこには、あんがい多くの可能も見出される。おのずからなる会得にも到るというものである。

試みるには少しばかり勇気がいる。少なくとも無精者であってはならぬ。工夫がいる。独創がいる。しかし、それが故にこそ、真の楽しさもまた伴うというものである。

一定の型と、くりかえされる手順と、それによってラクラクと保育すること、保育されること、これほど幼稚園に真の楽しさを失わせるものはない。子どもに。然り、いっそう、先生に。



幼稚園保育法真諦 初版

第二編 「保育の実際」の扉


用意なしに客を迎えてはならぬ。しかも、客を迎えてその用意を強いてはならぬ。

用意は細心でなければならぬ。しかし、細心は当方の心がけであって、それを客に示すべきものではない。その心入れがどこにあるのか気づかれないまでに細心でなければなるまい。

どこに用意があるのかも心づかせず、全く自分達の心からのように、その用意を受けさせてこそ、客をもてなすというものである。もてなしの上手とはいうべきものである。

その上手な趣向に誘われて、客は時の移るのも、もてなされていることも忘れてくれる。客の幸福これに如くはない。主人の喜びもまたこれに過ぐるはない。

これ、すべて、人が人に対する常道である。教育もまた同じ。




幼稚園保育法真諦 初版

第一編 「保育法真諦」の扉

教育はよりよく生かすことである。よりよく生かすには、自ら生きているものをまず存分に生かしておくことに始まらなければならない。これが人間の常識である。

相手の生活を認めゆるして、それを尊重することは、生きているものに対する義務であり、礼儀である。況んや相手は幼きものである。敢えて犯さざらんことに細心の用意がなくてはならない。これが人間の作法である。

生きているものが、われあるによって一層生きてくれる。しかも、われは常に相手の生活の下に潜み内にかくれて、その意図と努力とを表立てない。自らをあらわにしないで、そっと他を生かす。これ人間最大の愉快である。



幼稚園保育法真諦 初版

第三編 「保育過程の実際」の扉

つぎめ無きを貴ぶのは、練絹だけではない。われめ無きを賞ずるのは、青玉に限らない。何ものにも渾然として完きを美とするからである。断片と破片と、いくらそのひときれひときれが美しそうでも、ついに完きを味わい難い。まして、何を苦しんで、求めて、完きものを裁ち、裂き、こぼつことをしよう。

生命を貴び、自然を愛するものは、故意と作為とを嫌い、一切のわざとらしさを忌む。そこには、他の何ものを得ても、真を失うからである。まして、何のために、強いて、生命を傷つけ、自然を害うことを企てよう。

美と真を軽んじて、なんの正しい教育工夫があるろう。